

『つなぎ』の基本的考え方

(1) 青春を楽しむところ

知的障害のある人は、昔から「鉄は熱いうちに打て」や「覚えが悪いから、はやくから繰り返し訓練をしないといけない」などと言われ続けてきました。その手法もスパルタ的な方法が横行してきたと思います。

日本の教育政策の基本がここにあり、障害児教育はつねにその準ずる形で同じ思想の枠に入ってきたのだと思います。全国で高等部設置運動が盛んな頃、奈良県は高等部がすでに全校に設置されておりあり、全入運動（希望すれば全員高等部にいける）に特化していました。全国では、“青春を味わえる高等部を”と盛り上がりました。

運動の成果として全国で高等部が設置されましたが、『高等部産業科』の設置となったところがほとんどです。『普通科』とならなかったところに、“青春を楽しもう”と願う運動のはずが、“働く人材づくり”にかすめ取られた形となりました。高等部の教育課程の中に作業学習の割合が多くなっていることがその証です。この10数年は“キャリア教育”の推進があり、幼稚園からその主旨が取り入れるようになりました。

つなぎでは、高等部でいろいろ身に着けてきた力を活かすことはもちろんですが、なかなか経験できなかった“学校帰りに寄り道をしよう”“買い食いをしよう”“休みの日に待ち合わせをしていっしょに遊ぼう”“スマホで連絡をとりあおう”などに挑戦し、友だちと遊べる力、お金の使い方とその価値を学ぶことを大切にしています。

働くことばかり追求する内容では、せっかくお金を稼いでも使い方を知らない、何のために働くのか実感がわきにくいと思います。青春を楽しむ中には、失敗がたくさんあり、少し無駄遣いもあるかも知れません。“割り勘”の失敗経験には思わず笑いがこぼれます。

つなぎの4年間で、“待ち合せて友だちとラーメンに行くこと”や、“映画に行くこと”、“自分で企画を立てて友だちを誘う”など、たくさんの失敗をしながら成長をしてほしいと願っています。

(2) 自分づくりをするところ

専攻科運動の共通の課題になっているのが、『自分づくり』です。“自分”とは人格そのものであり、その人の存在そのものが祝福される社会であってほしいと思いますが、現在は「できる、できない」で評価される社会、数字で評価される社会が当たり前になっています。元々障害があることで“生きにくさ”を感じながら、一所懸命成長してきた彼らには、評価よりも「がんばって生きてきたね！今のままでいいよ！」と言ってあげたいものです。

高等部卒業後19歳を迎え、2年目には20歳を迎えます。法律では18歳成人となりましたが、多くの学生が20歳の誕生日は成人を意識するようです。つなぎでは20歳の誕生日は、支援員といっしょに“呑み会”をする『居酒屋デビュー』があります。何のお酒を飲むのか、何を食べるのかみんな早くから楽しみにしています。

20歳を迎える学生たちと過ごしていると、18歳の時より大きく伸びる姿に出会います。それは1年～2年の間、バカげたことをたっぷり楽しみ、自分づくりをしてきた学生が『大人』にあこがれ、『大人』を意識し始めるからだろうと思います。

“大人になりたい”“大人にならないといけない”という気持ちの芽生えは、自分を大きく成長させます。その様子は、“タテの発達”が伸びると言うよりも“ヨコの発

達”が大きく広がっていくのだろうと思います。

(3) つなぎの4年間は、次の3つの移行を目指します

①『学校から社会へ』の移行

学校からすぐに働く環境などに移行すると、ギャップが大きく慣れるのにすごく時間がかかります。社会理解を少しずつ進めていくのに4年間は大切な期間です。

②『子どもから大人へ』の移行

18歳で入学し、2年目には20歳を迎えます。成人式や成人の集い、居酒屋デビューなど、何となく大人を感じながら自覚が芽生えてきます。大人らしくなっていくことを応援します。

③『主体的な力をつけていく』移行

高等部までの学校生活でも、自宅での生活でも、自己決定の機会は本当に少なく、次から次へと時間に追われていることがほとんどです。

福祉型専攻科では、急がされることなく自分で何事も決めていく力をつけ、進路についても経験を深めながら自己決定していけるように支援します。4年目に社会へ出る意思決定が必要になるので、そのためにはたっぷり時間が必要です。